コメント

西　成彦

○**西**　まず自己紹介から始めますが，僕は比較文学ということで，もともとの出発点は東欧ということで，ポーランド文学の研究から始め，徐々にホロコースト問題にも関心を抱くようになって，いつしかユダヤの文学を追いかけてずいぶんになる自分がいる，というのが大まかな流れです。

それから，その後，熊本大学で比較文学講座の専任講師になり，たまたまラフカディオ・ハーンに興味を持つようになったせいで，日本に来る前に彼が住んだマルチニークというカリブ海の島のことにも関心が広がって，それがちょうどフランス革命200周年の時期だったということもあり，また，いわゆる「ワールドミュージック」の全盛期で，過去の奴隷制をも含め，植民地主義の長い歴史を問い直すポストコロニアル批評というのがどっと日本にも入ってきた時期とも重なりました。そうした時期をくぐり抜けたこともあって，2週間前にはカリブの奴隷制や海賊の問題を扱った会の司会もさせていただいたという経緯があります。

その後，ジェノサイド研究やポストコロニアル批評を日本に定着させるというときに，帝国主義・軍国主義の過去を背負った日本人のポジションということを考える手続きは避けては通れません。今日のコメントは，まさにそうした事柄に深く関わるわけです。

そこで，まず「コンタクトゾーン」という言葉を日本のポストコロニアル文学研究の中に生かすときの僕なりの視点をちょっと申し上げます。

日本は北海道を皮切りとして，それまでは長崎ぐらいしか「コンタクトゾーン」がなかったような状態から，開国後，幾つもの開港場ができ，そして北海道を植民地化して以降，続々と非日本人との接触ゾーンというものを切り拓くようになったと，そういう歴史があります。そういったときにメアリー・プラットと同じように，新大陸にヨーロッパ人がやってきたという，そういうレベルの支配者と被支配者，植民者と被植民者という，そういうバイナリーな対立で見ることができる。これが基本形ではあると思います。

ところが，大連であったり，上海であったり，あるいは日本人が移民の形で渡ったサンパウロであったり，そういう場所で日本人がみずからを定義しようとするときに，単純にバイナリーな図式では片づけられないわけです。つまり，まず西洋人に対してどうやって日本人である自分を対置できるのか，まさにそのレベルで，みんなはつまずくんですね。そして，結果として，現地の住民が第三者として視界から排除されてしまうということが起こる。そういうときに，どのような「コンタクト」に注目するのかということが非常に難しくなってくるということがあります。

たとえば，先ほど申し上げたラフカディオ・ハーンの研究で気づいたことをそこに挿入すると，ラフカディオ・ハーンは，カリブ海の島に行く前にニューオーリンズという町に十数年いました。

ニューオーリンズはもともとフランス領のルイジアナでした。しかし，ナポレオンが独立したばかりのアメリカ合衆国に対してそれを売却します。ヨーロッパでの戦争を戦うために軍事費を必要としたからです。結果的にフランス語を主に話していた白人たちは，アメリカ合衆国の国民になり，100年かかって，ほとんど英語を話すようになっていきます。つまり，ニューオーリンズという場所を考えるときにも，最初はフランス系の白人とネイティブアメリカンの接触があり，そこに今度は黒人が奴隷としてやってくる。そういうバイナリーな関係で済んだんですが，19世紀に入ると，その白人同士の間のヘゲモニー闘争が起こるわけですね。結果的にアングロサクソン系が勝利を収めるのですが，そういうふうな事例に非常に近いものを感じました。つまり，「コンタクトゾーン」ということを考えるときに，まず単純な二項対立ではなく，三つ巴，四つ巴になるような状況というのがまさに上海であったということです。特に英語スピーカーを追い出して，それ以外の人々と中国人とで三つ巴の関係を結ぼうとしているときに，しかしヨーロッパの言語としては英語の汎用性がいちばん高く，日本人と中国人が英語で会話したり，またドイツ人やユダヤ人も英語で話したりという，そういうある種，無色透明な関係があって，最後の堀井先生の話はそうした点に関わる話だったと思いました。

それから，コンタクトゾーンということを考えるときにもう一つ重要なのは，これはやはり支配・被支配という関係では済まないということを考えるきっかけをメアリー・プラットは作ってくれました。これはとても重要なことです。しかし，それが植民地主義を理解するときには，被支配者の側が面従腹背的に「親日」を装うというふうな種類の行動を単に「裏切り」だとは考えない，そういう価値判断の尺度が，そこでは示されたということだと思うんですね。

しかし，そこでもう一つ考えるべきは，支配者の側に，逆に支配者としてふんぞり返ることに対する気おくれであったり，それこそ罪悪感であったり，場合によっては現地人にむしろ自分自身が現地人であったらよかったと感情移入してしまうような，そういう妄想もつくり上げられていく。

さらに堀井先生の話にありましたように，まさに読者に面従腹背して，むしろ中国人が読みたいような記事を日本人が書いてしまうというような，そんな日本人の側の屈服というんでしょうか，そういう局面がそこにはあって，これはやはりアメリカ大陸のヨーロッパ人による統治の場合も同じです。つまり，未開人である現地人をただ文明開化していくというだけではなくて，むしろ未開人にわが身をなぞらえるというふうな秘められた欲望が，それこそ人類学者であったり，あるいは文学者であったりの内部には，わきあがるようなんですね。ですから，コンタクトゾーンと考えるときに，AからBへという流れと，BからAへという流れとがどう衝突するのか，あるいはそれがお互い補い合うのかという，そういう手順で考えていくべき事柄だろうというふうに思って今日の話を聞きました。

できるだけ短くしますけれども，お一人一人のお話について一言ずつ申し上げておくと，木田さんのお話は，僕は本当初めて聞いた話なので，漫画に関しておもしろく聞きました。特にサーパジョウというその人については，知る人ぞ知るということでしょうか。

○木田　そうですね。一つ研究書が出ていますので，関心を持っておられる方というのは徐々に出ているかなとは思うんですが。

○西　ユダヤ人の話は，次にしますけれども，白系ロシア人の位置というのは非常に微妙です。

つまり，彼らはコミュニズムに対して敵対感情を持っているということがありますけれども，別の見方をするなら，どこか親独的なんですね。つまり，むしろドイツの力をかりてでもコミュニズムを打倒したいという，そういうふうな種類のねじれを持っています。ですので，サーパジョウがドイツ情報局のファンドを用いながら，しかも英語で本を出していたというのは，おどろきでした。

それから，大橋先生のお話は，今度はユダヤ人に関するお話で，ユダヤ人についても，きょうお越しの関根真保さんをはじめ，日本にも上海のユダヤ人に詳しい方が少なくはなく，僕の友人でも黒田晴之さんという方がユダヤ音楽（＝クレズマー）の研究をされていて，やはりポーランドから1940年代に入ってから，それこそ杉原千畝のビザをもらったという人たちの上海時代のことなども研究をされているんですけれども，そういう上海に新しい彩りを添えたという意味でのユダヤ人の中に，聾唖の画家ブロッホがいたというのは，ある意味で嘘のようなといいますか，つまり言語的にサラダボールのような状態になっている中で日本語と英語と中国語がひしめき合うような，そういう状況というものを本人は耳では味わうことなく，むしろ目で全てをフラットに把握していくというスタイルを試した。そういった奇異な存在もまた活躍して，その記憶が戦後にはアメリカに運ばれていき，そういった彼が何十年もかけてダッハウ時代の映像を書いているというのも，これも本当に驚嘆する以上に感激させられました。

それから，堀井先生の話に関しては，これはやはり「コンタクトゾーン」と「グレーゾーン」という話をどう接合するのかというスリリングな話だったと思います。「グレーゾーン」という議論は，1986年にプリーモ・レーヴィというイタリアのユダヤ人で，アウシュヴィッツの生き残りが，『溺れるものと救われるもの』といういう一冊を書いた直後に自殺するのですが，そこでアウシュヴィッツでの経験を描きながら白黒はっきりできない，そういう領域について語り，それが90年代になってくるといろいろな形で受けとめられるようになってきたということを，今日の堀井さんの話を通して改めて知らされたわけですけれども，特にアジアにおいて，日本ではなく，韓国や台湾や中国の方々の方から，このグレーゾーンという議論が提起されるというのは，何か新しい展開を予感させますね。

ただ，これを日本人がどこまでふりかざしていいのかという問題がどうしても出てきます。そのときに僕が先ほど申し上げたコンタクトゾーンについての考察をちょっと活用してみたいんです。つまりグレーゾーンというのは単に親日派の尊厳を回復するための手段ではあり得ても，加害者であった日本人の免罪にもつなげるのは，やっぱり虫のいい話になるわけですね。ですから，逆に，加害者の中にどれだけ裏切りの根っこがあったのかというところも合わせて見ていくというんでしょうか。それはシンドラーだったり杉原千畝だったりが有名ですけれども，ドイツ人の側だってそんなに一枚岩じゃなかったわけだし，日本人だって決して一枚岩ではなかったという話は，きょうの堀井さんの話を聞いてもよくわかります。ですから，それを単に免罪につなげないための仕掛けをどうやってつくるのかな，というのが一番重要な問題かなと思って聞かせていただきました。

そして，最後にもう一つだけ強調しておきたいのは，僕は特に『バイリンガルな夢と憂鬱』という本を3年前に出したんですが，こういう多言語的な空間を考えるときに，我々はどうしても文字の多言語性に依拠してしまって，例えば，今も申し上げたように，日本語新聞，それ

から中国語新聞，英語新聞という，そういうふうなもので上海の言語空間を説明してしまいがちなんですが，それこそ先ほど申し上げたように，ポーランドから来たユダヤ人はポーランド語やイディッシュ語をしゃべっていたわけですね。しかも，それだけをしゃべっていたわけじゃなくて，幾つもの言語を本当に日曜大工のようにブリコラージュしながらしゃべっていて，僕は堀田善衛を読んでいて一番わくわくするのはそこなんですね。つまり，たとえば『祖国喪失』あたりを読んだときに，日本人と中国人と例えばユダヤ人が，時には英語，時には中国語，時には日本語を使いまわしながら議論している，その空気というのは映画をつくる過程の中で多少再現できるんだと思いますけれども，なかなか文学やそういう文字芸術だけ読んでいる分には実感しづらいところがあって，その辺もこれからコンタクトゾーンの問題，グレーゾーンの問題を考える上で避けては通れない問題だと思っています。

以上です。